

〈露〉の縁の〈なでしこ〉の花—源氏と藤壺 の贈答歌解釈—

山崎, 和子

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies / 大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

60

(開始ページ / Start Page)

346

(終了ページ / End Page)

338

(発行年 / Year)

2008-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003166>

〈露〉の縁のなでしこの花

源氏と藤壺の贈答歌解釈

序

紅葉賀巻において源氏は桐壺帝の御前で藤壺の若宮と初めて対面をするが、帝の若宮への鍾愛を目にし、源氏と藤壺は様々の感懐を抱いて退出する。その後源氏は藤壺に文をやり、二人の歌が交わされた。

御前の前栽の何となく青みわたれる中に、常夏のはなやかに咲き出でたるを折らせたまひて、命婦の君のもとに書きたまふこと多かるべし。

「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花

花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」とあり。さり

ぬべき隙にやありけむ、御覽せさせて、「ただ塵ばかり、この花びらに」と聞

こゆるを、わが御心にも、ものいとあはれに申し知らるるほどにて、

袖ぬるる露のゆかりと思ふにもなほうとまれぬやまとなでしこ

とばかり、ほのかに書きさしたるやうなるを、喜びながら奉れる…（紅葉賀

①三三〇（注一）

源氏が「常夏」の花に付けて贈った「よそへつつ見るに心は慰まで露けさまさるなでしこの花」歌に対し、王命婦から藤壺の「ほのかに書きさしたるやうなる」「袖ぬるる」の歌が届けられた。源氏と藤壺両歌ともに、従来いくつかの点において解釈の揺れが見られる。中でも、藤壺歌の「なほうとまれぬ」の「ぬ」を助

人文科学研究科 日本文学専攻
博士後期課程二〇〇六年度満期退学 山崎 和子

動詞の完了・打消いずれに解するのか、解釈が対立している。完了説の「そっけないもの」に思ってしまう（『新大系』）いとおしむ気にはなれませんが（『新全集』）、打消説の「疎む気にはなれませんが」（『全集』）、いずれに捉えるにしても、藤壺の若宮への愛おしい気持ちを通底することは確かである。しかし、逡巡しつつもやはり疎まれてしまうのか、或いはやはり疎むことのできない愛し子であると詠じるのか、それは藤壺物語解釈の上からも重要な論点である。従来は藤壺歌の「なほうとまれぬ」に重点を置き論じられてきたが、本稿では贈答歌であることに留意し、贈歌である源氏の歌にも詳細な検討を加えることで、若宮への思いを託した源氏と藤壺両歌の真意を考察してみたい。

一 「よそへつつ」歌について

はじめに、源氏の「よそへつつ」歌であるが、次の恵子女王歌が引歌とされる。

1 よそへつつ見れどつゆだに慰ますいかにかすべきなでしこの花（義孝集七三、新古今集卷一六雑上一四九二）

右歌には「贈皇后宮に添ひて春宮にさぶらひける時、少将義孝久しく参らざりけるに、なでしこの花につけて遣はしける」の詞書があり、「なでしこの花」を愛し子義孝に引き寄せ並べて見ても、慰められることのない母の心情を詠じたもの

である。

『源氏物語』や平安和歌において「とこなつ」「なでしこ」「やまとなでしこ」は同じくカワラナデシコを指し、中国渡来の「唐なでしこ」(セキチク)とは区別される。『古今和歌六帖』第六の草「なでしこ」には、「なでしこ」七首、「とこなつ」六首、「やまとなでしこ」三首が収められている。『源氏物語』では「とこなつ」五例、「なでしこ」一六例(襲の色目一例は除く)、「なでしこの花」「やまとなでしこ」各三例が用いられている。

2 枯れたる下草の中に、竜胆、撫子などの咲き出でたるを折らせたまひて、
中将の立ちたまひぬる後に、…

源氏「草枯れのまがきに残るなでしこを別れし秋のかたみとぞ見る

…(葵②五六～五七)

3 大宮今も見てなかなか袖を朽すかな垣ほ荒れにし大和なでしこ(同五七)

4 大和撫子をばさしおきて、まづ塵をだになど親の心をとる。(帚木①八三)

5 なほかの頭中将の常夏疑はしく、語りし心さままづ思ひ出でられたまへど、

(夕顔①一五五)

例2は源氏が葵上との遣児夕霧を「なでしこ」と詠み、「撫子」の花に付けて贈ったのに対し、3の大宮の返歌では「大和なでしこ」と詠まれている。4では、頭中将にとって「大和撫子」は幼子の玉鬘を指し、「塵をだに据ゑしとぞ思ふ咲きしより妹とわが寝る常夏の花」(古今集巻三夏歌・凡河内躬恒一六七)を引歌とすることで、「常夏の花」たる母親の夕顔を対照的に導き出している。5の「常夏」は、源氏が頭中将と夕顔の贈答歌(咲きまじる色はいづれと分かぬともなほとこなつ)にしくものぞなき「うち払ふ袖も露けきとこなつに嵐吹きそふ秋も来にけり」(帚木①八二～八三)を踏まえ、夕顔を指している。即ち、「なでしこ」は「撫でし子」を、「とこなつ」には「床」を掛詞とすることで、共寝をする妻や恋人を連想させる表現である。しかも、葵上と夕霧、夕顔と玉鬘の母子連想があるように、冒頭例の「常夏」と「なでしこの花」も藤壺と若宮母子を形象化している。ところが、「なでしこ」には「撫でし子」としてばかりではなく、若い女性の連想もある。落葉宮母御息所の山荘に咲く「垣ほに生ふる撫子のうちなびける色も

をかしう見ゆ」(夕霧④四〇二)の「撫子」は、夕霧に落葉宮を彷彿させる花であった。また、玉鬘が六条院世界で「なでしこ」と語られる時、それは本来の「撫でし子」としてのみならず、夏の町の西の対の庭に「撫子の色をととのへたる、唐の、大和の、籬いとなつかしく結びなして、咲き乱れたる」(常夏③二二八)花として、若君達が「心のままにも折り取らぬを飽かず思ひつやすらふ」(同)、恋愛対象の女君を象徴するのである。

それは和歌においても同様で、「わが宿の垣根に植ゑしなでしこは花に咲かなむよそへつつ見む」(後撰集巻四夏・読人知らず一九九)は、源氏の歌に続く文の言葉「花に咲かなん」の引歌とされるが、この「なでしこ」も本来は恋しい女性の面影に重ねて見ようとするものである。まず、この「なでしこ」における象徴表現の二面性を押さえておきたい。

次に、源氏が「よそへつつ見る」と詠じた時、それは何を何に「よそへ」て見たいのであろうか。現行注釈書では次のように把握している。

イ 常夏を若宮に……………『全書』・『新大系』・『新全集』

ロ 若宮をなでしこの花に…『集成』・吉見健夫(注2)・『鑑賞と基礎知識』

ハ 藤壺をなでしこの花に…小町谷照彦(注3)

ニ 若宮を藤壺に……………『全集』・『大系』・木船重昭(注4)

イ・ロは「若宮」と「常夏」或は「なでしこ」、ハは「藤壺」と「なでしこ」、ニは「若宮」と「藤壺」の関係として捉えている。ハ解釈の小町谷照彦氏は、問題の贈答歌二首において源氏が藤壺を「なでしこ」に、藤壺が若宮を「大和なでしこ」に準えて歌を詠むことが、「対照的」な二人の乖離する心を表すと捉え、贈答歌であることの特質に留意されたのであった。しかし、ここで源氏が「なでしこの花」に込めたのは、藤壺か若宮か、いずれか一方に限定される表現であったのだろうか。確かに、恵子女王歌で「なでしこ」は「撫でし子」として(愛し子の面影を揺曳させるのであるが、右の『後撰集』一九九番歌をはじめ、

6 妹と我と寝るとこなつの花なればなべて人には見せんともせず(古今六帖第六なでしこ・凡河内躬恒三六二六)

7 天曆御時、広幡の宮す所久しく参らざりければ、御文遣はしけるに
山がつの垣ほに生ふる撫子に思ひよそへぬ時の間ぞなき(拾遺集巻一三恋

三・村上天皇御製八三〇

など「こなた」「なでしこ」を恋歌として詠む歌がある。源氏はこのことを踏まえた上で、まず「常夏」に藤壺の面影を重ねて見ていたと思う。それを歌では「なでしこの花」と詠じたことよって、「常(床)夏」から「撫でし子」へと連想を紡ぐ、重層的表現がなされたのではあるまいか。次章では、藤壺から若宮へと連想を繋ぐ歌の重層性について考えてみたい。

二 「常夏」から「なでしこの花」へ

『源氏物語』を模した『夜の目覚』(巻二)でも、大納言は中君との間に生まれた姫君を引き取った後、中君に手折った撫子の花を添え「よそへつつあはれとも見よ見るままにほひにまさるなでしこの花」歌を贈っている。しかしここでは、二人の間に生まれた愛し子を「なでしこの花」に準えて「あはれとも見よ」と言うもので、歌意に不明な点はない。ところが、源氏の歌は今少し複雑な要素を持ち、『岷江入楚』(注5)においては「二つの心」として「なでしこの花↓若宮」「若宮↓藤壺」への連想を指摘していた。『全集』(小学館一九七〇年)は頭注で、次のように述べている。

「なでしこ」は「常夏」と同じ花、いま庭前にある。歌中では「撫でし子」(愛撫すべき若宮)とする。常夏の花↓(なでしこ)↓若宮↓藤壺と、次々にイメージの移っていく歌。「よそへつつ見れど露だに慰まらずいかにかすべきなでしこの花」(新古今・雑上 恵子女王)による歌であるが、単純に「なでしこ」を「子」になぞらえただけではなく、さらに複雑である。

「さらに複雑」なイメージの連鎖と捉え、「なでしこの花」若宮をあなた様にご寄せて忍ぶつもりでおりましたが」と現代語訳している。或いは、木船重昭氏は、このイメージの重複は「よそへつつ」の機能にあると捉えた。氏は、「つつ」が「なでしこの花を藤壺の宮に」「なでしこの花を若宮に」「若宮を藤壺に」という「はなやかに咲き出でたるとこ夏の花において、いま三重写しとなり相錯して映ずる」(注6)働きをすると述べている。

「よそへつつ」における動詞「よそふ」は、「ヨシ(寄)ソへ(添)の約か。甲を乙に引き寄せて並べ、両者を関係があるとする意」(『岩波古語辞典』一九七四

年)と説かれ、また「つつ」は、同主体において用いられる場合は同じ行為の反復を表す接続助詞と捉えられる(注7)。従ってここは、主体である源氏の「よそふ」行為の反復を表すと考えられる。『源氏物語』には「よそふ」一六例、「動詞十よそふ」形で一七例が用いられており、平安和歌にも用例が多い。

8 なぎかげやいかが見るらむよそへつつながむる月も雲がくれぬる(須磨② 一八二)

9 山陰のうつき垣根ぞ消え残る雪をぞ花によそへつつ見る(好忠集四〇)

10 かの見つるさきさきの、桜、山吹といはば、これは藤の花とやいふべからむ、木高き木より咲きかかりて、風になびきたるにほひは、かくぞあるかし、と思ひよそへらる。(野分③ 二八四〜二八五)

11 雨ふれば北にたなびく雨雲を君によそへてながめつるかな(貫之集八〇四)

12 よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔の花(宿木⑤ 三九四)

例8は父故桐壺院の「なぎかげ」を「月」に、9の曾禰好忠歌は「消え残る雪を」「花に」引き寄せ並べること反復しながら「ながめ」「見る」のである。10では野分に垣間見た紫の上を「榊桜」、玉鬘を「山吹」に喩えた夕霧が、今また目にした明石の姫君は「藤の花」に重ねて自然と捉えられることを表し、11の紀貫之歌も「北にたなびく雨雲を」越の方に居る「君に」引き寄せて眺めたことを詠ずるものである。「よそふ」は、今眼前に存在するものに他のここにはないものを引き寄せて並べ、その類似性や同質性において見たり、言ったり、思ったりすることの表現である。

12は、大君が中君と自分との結婚を望んでいたにも拘わらず、匂宮と結婚させてしまった薫が、亡き大君の代わりに中君と結婚すべきだったのかと後悔する歌である。「白露」に大君を、「朝顔の花」に中君を見立て、「朝顔の花」には必ずや「露」が置くことから、「白露」が「朝顔の花」と前世からの約束をしていたのだろうかと詠じている。前述の木船氏はこの例についても、「よそへてぞ見る」とは「まずはあさがおの花を中君に、そして、それはまた、その中君を大君に『よそへてみる』という二重の「継起的反復を意味する」と述べている。しかしここは「つつ」とはなっておらず、「白露」「朝顔の花」に「大君」「中君」を取り合わ

せることは暗喩として成立しているのであって、実際に「よそへ」るのは、薫が「中君」を「大君」に引き寄せ並べ見ることである。源氏の歌も、歌の文脈からは、眼前の「なでしこの花」を何かに「よそふ」行為を反復しながら見ていることを表す。

ところで、源氏の文には歌に続き「花に咲かなんと思ひたまへしも、かひなき世にはべりければ」の一文が添えられていたが、それは歌を補足する内容として、「露けさまさる」理由を述べたものである。注釈書では「花に咲かなん」を次のように解釈している。

イ 早く花に咲いてほしい意……………『全書』・『大系』

ロ 若宮が美しく成長してほしい意をこめる…『全集』・『新全集』

ハ 若宮がお生れになつたら……………『集成』・『新大系』・『鑑賞と基礎知識』

「花に咲く」のは、引歌の『後撰集』歌「わが宿の垣根に植ゑしなでしこは花に咲かなむよそへつ見む」(後撰集卷四夏・読人知らず一九九)にしても、問題文の文脈からも「なでしこ」である。「花に咲かなん」そのものが子供の誕生の喩として詠まれた例は見ないように思われ、むしろ和歌の伝統において「花に咲く」のは恋歌の表現である。『後撰集』歌も部立は夏であるが、本歌と見られる『万葉集』の同伴家持歌「わが屋戸に蒔きしなでしこいつしかも花に咲きなむよそへつ見む」(巻八一四四八)は「春の相聞」である。『伊勢物語』(伝為氏筆本巻末所載の小式部内侍本)に見られる異伝歌「わが宿に蒔きしなでしこいつしかも花に咲かなんよそへつ見む」にも「むかし、をとこ、えあふまじかる人を恋ひわたりて」の詞書がある。『万葉集』「夏の相聞」に「隠りのみ恋ふれば苦し撫子の花に咲き出よ朝な朝な見む」(巻十一九九二)などの類似歌もあるように、「なでしこ」が「花に咲く」ことは、本来は美しく咲いた「なでしこ」の花に恋しい女の面影を重ねてその女を想うという、明らかに恋歌として詠じられたモチーフである。

しかし一方では、

13 みこたちを冷泉院親王になしてのちよませたまへる

おもふこと今はなきかなでしこの花に咲くばかりなりぬと思へば(後拾遺集卷七賀・花山院御製四四一)

のように、「なでしこの花に咲く」ことを子の成長に準えた歌がある。そこでは、「なでしこ」が「撫でし子」としてイメージされるが故に、それが「花に咲く」ことは子の成長を表したと考えられる。ここでの源氏も「なでしこ(撫でし子)」として結実した若宮の成長を「花に咲く」と捉えるのであろう。

つまり源氏は、まず「常夏」の花に共寝をした藤壺を重ねて見、恋情を忍ぶべく思ったけれども、藤壺とは恋の成就することのない宿命故に心慰むことはなく、涙にくれるのである。その涙は「露」となって「なでしこの花」に置き添うのであるが、それは慕わしい藤壺を思いこがれる涙であると同時に、一方では、無事に生まれて成長して欲しいと願った若宮は、わが子とは名乗ることのできない「撫でし子(愛し子)」であることを実感した今、「なでしこの花」に注がれる涙となつて、「常夏(藤壺)」と「なでしこの花(若宮)」の象徴性と連想が、一首を二重の意味を帯びた歌へと導いていくのである。「よそへつ見む」には、一つには「常夏」の花に藤壺を重ねて見ること、今一つには「常夏」の異名である「なでしこ」に若宮を重ねて見るといふ、表現としての二重の意味が考えられる。しかしそれは、木船氏の言われる「つつ」の働きによるのではなく、源氏が藤壺への恋慕を語りながら、わが子への愛情へと転位させていくのは、「なでしこ」の象徴表現としての二面性に支えられたものであったと思う。

今一つ問題歌を考察する上で見落としてはならないのが、「なでしこ」と「露」と「露」の取り合わせである。

14 君なくて塵積もりぬるとこなつの露うち私ひいく夜寝ぬらむ(葵②六五)

15 見るままに露ぞこぼるる後れにし心も知らぬ撫子の花(栄花物語・巻第九 いはかげ)

例14の葵上亡き後、払う床の「露」は源氏の涙である。また、一条天皇の崩御後、硯瓶に挿してある「撫子」を東宮(当時四才の敦成親王)が取り散らかしたのを見て上東門院(藤原彰子)が涙する『栄花物語』の例15も、「撫子の花」には幼い東宮を、こぼれる「露」は「涙」を暗喩している。「露」が「涙」の喩であることは、平安朝文学においては今更言うまでもないことであるが、この「露」と「なでしこ(常夏)」における深い縁が源氏歌のみならず藤壺歌においても重要

な核となっている点に留意される。これについては、後の藤壺歌を論じる所で詳しく述べることにした。

更に、今日の注釈書では「露けさまさる」を「かえつて花の露にもまして涙がこぼれました」(『全集』『新全集』、『新大系』もほぼ同意)など、源氏の涙と花の「露」を比較する意に解釈するものが多いが、これは元々露を置いていた「なでしこ」の花に源氏の泣く「涙」が「露」となって加わり、「二層露の置き添わる」(『集成』)意と捉えなければならない。

かくて、源氏の「よそへつつ」歌は、次のように解釈される。

〔常夏〕の花にあなたの面影を重ねながら見ますに、心は慰められず、こぼれる涙が「露」となって置き添うことですが、また、その「なでしこの花」には愛し子である若宮の面影も重なり、愛おしさに一層の涙を添えております。

三 「袖ぬるる」歌について

藤壺の「袖ぬるる」歌については、従来、特に「なほうとまれぬ」の「ぬ」が問題にされてきた。完了の助動詞「ぬ」の終止形と捉えるならば、逡巡しながらもやはり若宮を疎ましく思ってしまう苦渋の心中を述べた四句切れの歌となり、打消の助動詞「ず」の連体形と捉えるならば、やはり疎むことのできない愛し子であると詠じたものと捉えられる。古く『孟津抄』『湖月抄』などは完了説、『源氏物語玉の小櫛』(注8)『源氏物語評釈』などは打消説に立つが、二説は今なお解決されていないでいる。

イ 完了…『大系』・『集成』・『新全集』・『新大系』・川島絹江(注9)・鈴木宏子(注10)・『鑑賞と基礎知識』・工藤重矩(注11)

ロ 打消…『全書』・『全集』・『玉上評釈』・木船重昭(注12)・小町谷照彦(注13)・吉見健夫(注14)・柏木由夫(注15)

ハ 両説を認める…徳岡涼(注16)・石坂晶子(注17)

対立するイ・ロ説に対し、近年徳岡氏は『用心』の歌」という観点から「両義を兼ね備えたもの」と捉えた。しかし、氏の言う「第三者の目を意識し」た配慮とは、漏洩した場合を考え、喩として詠み明確には表現しないという配慮であり、

藤壺が「疎む」か「疎まない」かの表現性とは次元の異なる認識である。また、それに先立つ『源氏研究』第7号(二〇〇二年四月)のツベタナ・クリステワ、三田村雅子、河添房江各氏の対談においても、河添氏は打消説に立ちながらも、「光源氏は、打ち消しと完了の両方を考えたのかもしれないけれど、彼自身は打ち消しにとつた。少なくともそう取りたかつた」と述べ、同じく打消説に立つツベタナ氏も「両義的な読みの可能性を『開く』ため」に敢えて作者の選んだ表現ではないかと捉えている。確かに表現の内包する多面性をも考察しなければならぬが、物語において位置づけられる登場人物たちの真意を今少し慎重に表現の中に探ることが可能ではないかと思う。

今一度、「なほ…ぬ」例を見てみよう。『源氏物語』においては、問題の歌以外に「なほ…ぬ」の表現を持つ歌は見られない。

16 時鳥汝が鳴く里のあまたあれば猶うとまれぬ思ふものから(古今集卷三夏歌一四七)

17 思へども猶うとまれぬ春霞かからぬ山もあらじと思へば(古今集卷一九雑体一〇三二)

18 見ればなほ野辺に枯れせぬたまささのはわきの露はいつも絶えせじ(中務集二二七)

19 わが恋は七夕つめにかしつれど猶ただならぬ心地こそすれ(公任集三二)

『源氏物語』以前の『古今集』2例では、例16は、浮気な鳥とされる「ほととぎす」を詠じた歌で、「なほ…ぬ」と下接する「思ふものから」の間は明らかに切れており、四句切れである。17も同意趣歌であろうことから、一・二句と三・五句が倒置した、二句切れと見るべきで、いずれも「完了」の終止形である。ところが、18・19は、体言に掛かる連体修飾格であることから、「打消」の連体形である。よって、文法的には「完了」「打消」ともに可能である。『源氏物語』の地の文においても、「なほ…ぬべし」と連接する場合は「完了」であり、「なほ梅壺あたまひぬ」(少女③三一)という「完了」例もあるが、多くは「なほかく人知れぬことは苦しかりけり」(夕顔①一九五)のように「打消」例として用いられている。従ってやはり、「なほ…ぬ」例の検討からは解決が困難なように思われる。

従来の解釈では、木船重昭氏は、『源氏物語』と『紫式部集』の四句切れかつ体言止めの歌と、花で体言止めとなる歌を検討した上で、当該歌は「三句中止し体言止め」であるため「打消」と結論づけた。吉見健夫氏も、当時の和歌の典型的用例に四句切れの歌はないことを根拠として打消説に立つ。一方、藤壺歌は『古今集』の強力な磁場の中にあたり、『古今集』歌と同じく「完了」の用法であるとする鈴木宏子氏は前掲論文において、

「なほうとまれぬ」とは、「思ふ」とワンセットになって、愛着があるものもの許容できない欠点があつてやはりうとましく思われる、というあややかな感情を表現することばなのであつた。

と述べている。傾聴すべき見解であると思うが、「思ふ」と「うとむ」ことのはさまで揺れる心の表現として「なほうとまれぬ」を支えるためには、『古今集』歌16・17にはある、逆態的前提となる「思ふものから」「思へども」に当たる表現が藤壺歌にはない。また、「うとむ」が「否定形になることは極めて稀である」とされる点についても、『源氏物語』の「うとむ」18例中「やうやう目馴れて、いとしも疎みきこえたまはず」(常夏③三三五)1例と「なくそ」の禁止表現2例があり、一概にそうとも言えないと思われる。

同じく「完了」説の工藤重矩氏は、「完了」と結論づける前提として、「袖が濡れる」ことは「負の事態」であると捉えている。「袖ぬるる露のゆかりと思ふ」ことは「負の事態・感情」であるが故に、「大和撫子の花」は「やはり依然として」疎ましく思われる「負の感情」としか整合性がないと結論するのである。「…にも」が「なほ疎まれぬ」理由・原因を表していることに間違いはない、がしかし、「ゆかりと思ふ」こと自体を、最初から「負」と決めてかかることに疑問は生じないものだろうか。

前述の鈴木宏子氏も「袖ぬるる露のゆかり」であることが当該歌にとつて重要であると説くが、その立場からは、若宮が「ゆかり(源氏の子)」であることは「許容できない欠点」と捉えるのである。工藤氏は「負」であることを前提として、後半部の解釈を規定するのであるが、ここで「露のゆかり」であることの好悪を論じるとすれば、「露」と「なでしこ」(やまとなでしこ)の間に縁としての「ゆかり」であることが好悪を左右する重要な語となるはずである。次に「ゆかり」について考えてみたい。

四 「露のゆかり」の「なでしこ」の花

『源氏物語』において「ゆかり」は、藤壺の姪である紫の上を「紫のゆかり」——藤壺の縁・血縁者と語る例が最も印象的であるが、右近が玉鬘を「はかなく消えたまひにし夕顔の露の御ゆかり」(玉鬘③二二〇)と語り、「守のゆかり」「おのが心ひとつにもあらぬ人のゆかり」「春宮の御ゆかり」など人間関係における縁者・係累を表している。その場合、地の文ではその「ゆかり」対象への心情は好悪両方に向けられていると言える。しかしながら、和歌における「ゆかり」は、次のように詠じられていることに注目される。

- 20 ねは見ねどあはれとぞ思ふ武蔵野の露わけわぶる草のゆかりを(若紫①二五八〜二五九)
- 21 むさしのの草のゆかりと聞くからにおなじ野辺ともむつましきかな(古今六帖第二雑の野一一五七)
- 22 雪降ればうときもなく草も木もひとつゆかりになりぬべらなり(貫之集三三三)
- 23 おほぞらのゆかりと聞けばまだ見ねど雲にうづめるあとぞゆかしき(安法集六九)
- 24 紫のひととゆゑに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る(古今集卷一一雑上・読人知らず八六七)

例24の、ただ一本の紫草が生えているが故に武蔵野の草すべてが懐かしく心にしみて思われることから、愛する人に繋がるすべてのものを「あはれ」と見る愛憐の情を詠む『古今集』歌を踏まえ、右歌では「ゆかり」対象への「むつまし」く、「うときもなく」「ゆかしき」「あはれとぞ思ふ」心を詠じている。中でも例20の「根」と「寝」を掛詞とする源氏の歌は、紫の上が藤壺の「草のゆかり」であるからこそ「あはれとぞ思ふ」のである。藤壺の言う「露のゆかり」も、例24の『古今集』歌を基底に「あはれ」と捉えるべき対象を詠じたものであり、藤壺にとつて「やまとなでしこ」は「露のゆかり」であるが故にこそ、愛情を注ぐ対

象であったのではないだろうか。

本来、歌において「露」と「なでしこ(やまとなでしこ)」を詠じる時、両者の間には深い縁がある故に取り合わされるのであり、「ゆかり」関係にあることを嫌なものとして「うとむ」ことはないと思われる。「露のゆかりと思ふにも」が「なほうとまれぬ」理由・原因を表す構文である以上、藤壺も縁深い「露」と「やまとなでしこ」のいずれをも疎むことはあり得ないのではあるまいか。しかも、『源氏物語』中の「やまとなでしこ」3例は、いずれもが〈幼い愛し子〉を暗喩する表現である。確かに、不義によって生まれた若宮は社会的には許されない罪の子であり、疎まれてしかるべき存在である。にも拘わらず藤壺は「露」との深い縁において、源氏が父親であるが故に、やはり疎むことのできない〈愛し子〉であると、源氏の子であることを暗に告白し、源氏との間に生まれたわが子を愛おしむ母の心情を漏らしたのではなかったのか。

その時藤壺が「わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほど」であったことは、源氏ばかりでなく、藤壺も「いとあはれ」とものの道理を深く心に知覚していたのであり、若宮を疎む心情にあったとは言いがたい。「うとむ」は対象を嫌悪し、自分とは関係ないものとして隔てをおき、拒む行為である(注18)。「うとむ」は対象への深い愛憐の情を表す「あはれ」(注19)とは相容れない心情であり、わが子を拒否する行為である。藤壺の「なほ」という思いは、真実を露わに述べることへの逡巡と葛藤を経た上で「なほ」と万感を込めて応じた思いであったと考えられる。つまり、「なほうとまれぬ」は、やはり疎むことができないという「打消」の表現であり、藤壺歌も三句で中止する体言止めの歌として、形態の上からも源氏歌と密接に響き合っているのである。

とは言え「完了」説でも、当然藤壺が若宮を愛おしんでいたという事実は認めており、それを踏まえた上で前述の川島絹江氏は、むしろ歌は藤壺の「表面上の強い拒絶」を示したものであり、源氏に「期待を与え」てはならない故に、「毅然と自己規制を強めている」と述べている。しかし、ここで「わが御心にも、ものいとあはれに思し知らるるほど」であった藤壺の、その時わずかにこぼれ出た思いまでもが、「拒絶」の歌であったのだろうか。むしろ、あからさまな源氏への返歌としてではなかったからこそ、藤壺の本心が漏らされたと思うのである。

ところで、「袖ぬるる」主体の解釈についても、現行注釈書の多くが「あなたの

お袖を濡らす涙の露」(『新全集』)など、「源氏」の袖と解している中で、前掲の吉見健夫氏、柏木由夫氏、工藤重矩氏は、『源氏物語玉の小櫛』が「初句、御みづからの也」とする、古い注釈に多い「藤壺」説を再提示している。「袖ぬるる」という形での例は、『源氏物語』では当該と次の六条御息所歌のみであり、平安和歌の中にも多くはない。

25 袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき(葵②三五)

26 袖ぬるる荒磯波と知りながらともにかづきをせしぞ恋しき(更級日記・初瀬)

いずれも「袖ぬるる」は下接の「こひぢ」「荒磯波」を修飾する語である。例25の「こひぢ」は「泥」と「恋路」を掛詞とし、「袖ぬるる」には田子の袖が泥に濡れることと六条御息所自らの袖が恋の涙に濡れることを掛けて詠じられた、源氏への「異例とされる女からの贈歌」(『新全集』)である。『更級日記』例26も、荒磯波に袖が濡れるように、自らが泣くことが多いと知りながら共に宮仕えをした女房仲間との懐旧の歌である。同様に、藤壺歌においても「袖ぬるる」のは、作歌主体である藤壺の袖が濡れるのである。そして、袖が濡れる所以は「露のゆかり」にある。ここでの「袖ぬるる」は「露」に掛かるのではなく、「露のゆかり」に掛かっていると見られる。「露のゆかり」は「やまとなでしこ」の拠つて来る所以を言うもので、「やまとなでしこ」が「露」の縁であることにおいて藤壺は涙して「やまとなでしこ(若宮)」を見ているのである。しかも、贈答歌としても、藤壺の袖をも濡らす「露けさまさるなでしこの花(若宮)」に置く「露」は、源氏の〈涙〉であり、「やまとなでしこ(若宮)」が「露のゆかり」であると言うことで、「露」は父親の源氏を暗喩することになる。

工藤氏の言う〈負〉の概念の照応については、25・26の「袖ぬるる」主体は〈袖が濡れる〉ことを承知しながら「下り立ち」「かづき」濡れていることから、「下り立ち」「かづき」することも〈負〉と言うのでなければ整合性は成り立たないことになるが、右例の「下り立ち」「かづき」することも含めて〈負〉と限定するべきかは疑問が残る。従って、藤壺歌の「やまとなでしこ」は「露」との

「ゆかり」において愛おしく思われるのであり、「ゆかり」関係にあるいずれに対しても藤壺に「うとむ」心はないと思われる。それは源氏への秘められた思いとしても還流していくものではあるが、歌は「露のゆかり」である「やまとなでしこ(愛し子)」「へと収斂している。

以上のことから、一首は次のように解釈できよう。

私も涙に濡れながら見る(なでしこ)は、「露のゆかり」(あなたの子)と思うにつけても、やはり疎むことのできない「やまとなでしこ(愛し子)」です。

結び

贈歌で源氏は恋しい藤壺への変わらぬ思慕と、わが子への愛おしみを「なでしこの花」に込めて重層的に詠じた。しかも、和歌に添えた「花に咲く」ことのない「かひなき世」には、藤壺との成就することのない恋と、父親と名乗ることのできないわが子への哀しみを訴えたがために、藤壺は心動かされたのではないかと思われる。藤壺は「やまとなでしこ」が「露のゆかり」であることに準えて、若宮が源氏の子であることを明かしたのであった。藤壺の歌は「ほのかに書きさしたるやう」な筆跡であったとされる。注釈書では「墨色もかすかに」(『全集』「墨色薄く」(『集成』)など、墨色の薄さとしてのみ捉えているが、「ほのか」は「心の奥にぬくもりや温かさを感じる場合に用いる」(注20)語である。結果として現れ出たものは墨色を押さえるという行為であったかも知れない。しかしそれは、わが子への愛情を抑制し、葛藤し逡巡しつつもわずかに語られ出た藤壺の本心であったことを示唆する表現であると思う。

若紫巻で藤壺懐妊後見た「おどろおどろしうさま異なる夢」(①二三三)を夢解きが「及びなう思しもかけぬ筋のこと」(同)と合わせたことから、源氏は藤壺の御子がわが子であることを予測していた。しかしここで藤壺自らにあなたの「ゆかり(子)」と告げられたのであるから、「胸うちさわぎていみじくうれしきにも涙落ちぬ」(紅葉賀①三三三)のである。若宮が源氏の子であることは、読者にとって周知の事実であるとしても、藤壺の恋情について多くを語らないこの物語において、和歌でしか語り得ない真実であっただろう。この後二人は「春宮の御ため」(賢木②一一三)、「わが身をなきになしても春宮の御世をたひらかにおはしま

さば」(同②一三八)と冷泉帝即位のために結束して事に当たっていくが、そこにはここで若宮が二人の御子であること、しかもお互いに愛し子であるという確信があったからに他ならないと思う。若宮が紛れもなく二人の愛し子である、そのことを暗黙の内にも了解し得たのはここを措いてはないのである。

注1 『源氏物語』の本文は「新編日本古典文学全集」本により、()には巻名、新全集

本の巻号、頁を示す。他は「日本古典文学大系」本によった。上記と「日本古典全書」

「日本古典文学全集」「新潮日本古典集成」「新日本古典文学大系」本、『源氏物語評

釈』(玉上琢彌)『源氏物語の鑑賞と基礎知識』は略称して記した。和歌は『新編国歌

大観』(角川書店)によるが、表記を改めたところがある。

2 吉見健夫「紅葉賀巻の藤壺——贈答歌の解釈から——」(『中古文学論攷』一七、一九九六年二月)。

3 小町谷照彦「源氏物語の歌ことば表現」(東京大学出版会一九八四年)二二六頁。

4 木船重昭「猶うとまれぬやまとなでしこ——藤壺の宮の成長と位境と——」(『平安文学研究』第四六輯一九七一年六月)。

5 「私に云此歌に二つの心あるへき歟。一つには只今折ておくり給へるまことなでしこの花をわか宮によそへて見奉れはいよ／＼若宮の事の恋しくて露けさまさるとなり。又一つには今日若宮をみ奉り藤つほによそへて見奉るから露けさのまさると也。其時はなでしこの花とは若宮をさしていへる也。次の詞も本歌の心よくなかなへり…種まきながら我物にならぬをかひなきといへる也」(第七)。

6 注4に同じ。

7 山崎良幸『日本語の文法機能に関する体系的研究』(風間書房一九六五年)。

8 「四の句、猶うとまれざる也、にも猶といふにてしるべし。此ぬを、畢ぬといへるは、

猶を、俗意の猶に見たるひがこと也」とする。

9 川島絹江「藤壺の和歌——『源氏物語』における『伊勢物語』受容の方法——」(『国語国文』一九九二年一〇月)。

10 鈴木宏子「藤壺の流儀——『袖ぬるる露のゆかりと思ふにも——』」(『日本文学』

VOL.53、二〇〇四年二月)。

11 工藤重矩「源氏物語の和歌の読み方——夕顔「心あてに」と藤壺「袖ぬるる」の和歌解釈——」(『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店二〇〇七年)。

- 12 注4に同じ。
- 13 注3に同じ。
- 14 注2に同じ。
- 15 柏木由夫『紅葉賀』の藤壺の和歌『袖ぬるる…』の解釈について『王朝女流文学の新展望』竹林舎二〇〇三年。
- 16 徳岡涼「紅葉賀巻の藤壺詠について」『国語国文学研究』三八、二〇〇三年三月。
- 17 石阪晶子「裁きに抗う——藤壺の宮・身体に刻印される『宿世』」『人物で読む源氏物語』藤壺の宮。勉誠出版二〇〇五年。
- 18 山崎良幸・和田明美『源氏物語注釈 一』（風間書房一九九九年）一二七頁。
- 19 山崎良幸『「あはれ」と「ものあはれ」の研究』（風間書房一九八六年）親子の恩愛の情の表現、一四一頁〜一四六頁。
- 20 注18に同じ。三八〇頁。